

『トリスタンとイゾルデ』の H. Kupfer の演出

河原俊雄

『トリスタンとイゾルデ』の第二幕第三場。家臣のメロートの導きでトリスタンとイゾルデの情事をマルケ王はここで目撃する。この場面に焦点を絞って、1983年のパイロイトでのポネルの演出、1998年のミュンヘンでのコンヴェチュニーの演出、2000年のクプファーの演出を比較した。

マルケ王はここで、もっとも信頼していた部下のトリスタンの裏切りをまさに目の前で見る。ポネルの演出ではその時のマルケ王の悲しみが強調される。マルケ王を歌うサルミーネの声と身体全体の動きからは、その悲しみの途方もない深さと重さが切々と伝わってくる。この演出は舞台美術の美しさとあいまって今でも多くの人に愛されている。

対してコンヴェチュニーの演出では、マルケ王の聡明さと理知的な思慮が前面に出てくる。トリスタンとイゾルデは道に迷った。その二人に道に迷ったことを悟らせる。そうしたマルケ王の気持ち、トリスタンとイゾルデの手を取り長椅子に導き、二人の間に座るといふ動きで視覚的に表される。この演出では椅子は昼の世界・現実の世界の象徴となる。そしてこの後、トリスタンとイゾルデのデュエットの部分では、二人はマルケ王の手を振りほどき、衣裳を脱ぎステージの階段を降りたところで歌いはじめる。階段を降りたところは、闇の国・死の国の象徴。つまり、マルケ王は説得しきれなかった。それでも彼は取り乱したりはしない。あくまでも人格のできた賢者。そういった側面が強調される。

クプファーの演出はこの両者とはまったく異なる。その特徴を一言で言えば、怒り。マルケ王はトリスタンを絶対に許さない。抱きつきすがりつく彼を邪険に突き放す。そこには一片の容赦もない。その姿勢が、ルネ・パペの歌にもバレンボイムの音楽の作り方にも鮮明にあらわれる。自分が一番信頼していてその忠誠心を露ほども疑わなかった家臣が自分の新妻と恋仲になる。それは悲しいこと、辛いこと、どうにもやりきれないこと。そういう受けとめ方もできる。事実、今までの演出はほとんどすべてそう解釈してきた。しかしそれはあまりに現実離れしていないか。我々と同じ生きた人間とは別のものをマルケ王を見るうえで想定していないか。クプファーの演出はここから始まりここを貫く。

以上、三つの演出の是非をリブレットを確認しながら考えてみた。なお参考にした資料は、ポネルとコンヴェチュニーの演出はビデオ。クプファーの演出は2002年3月のベルリン国立オペラでのゲネ・プロ。